

成人の愛着スタイルに関する一考察

— 内的作業モデルと対人欲求との関連から —

一ノ宮 了慈

1. 問題と目的

1-1. 成人愛着研究の概観

Bowlby, J. (1977) は、愛着 (attachment) を「ある特定の他者に対して強い結びつきを形成する人間の傾向」と表現し、乳幼児期に養育者や特定の他者との間に培われる関係性を愛着理論として提唱した。加えて彼は、愛着は「揺り籠から墓場まで」という生涯発達のな特徴を有するものであり、継続的に個人のパーソナリティ発達に影響を与えるものであるとしている。こうした視点を受け継ぎ、愛着理論に関する後の研究では、従来の乳幼児期の子どもや母子の関係性を対象とした研究に留まらず、青年期・成人期を対象とした愛着研究が行われるようになった。乳幼児と養育者 (主に母親) を対象とした研究には、Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) のストレンジ・シチュエーション法をはじめとした、愛着行動や相互作用に関する観察研究が挙げられる。Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) はこの実験的な観察法により、幼児には3つの行動パターン、すなわち愛着スタイルがあることを明らかにした (Aタイプ:回避型 avoidant、Bタイプ:安定型 secure、Cタイプ:アンヴィバレント型 ambivalent)。また後に、Main, M. et al. (1989) によって新たな行動パターン (Dタイプ:無秩序型 disorganized) が追加され、今日では専ら、愛着スタイルはこの4タイプで捉えられている。

次に、青年期・成人期を対象とした愛着研究では、「乳幼児から青年期へと至る過程で、愛着が行動レベルから精神内界の愛着表象や自己表象に移行する」という想定のもと、行動レベルの愛着に代わって「内在化された表象レベルの愛着」に着目した研究が行われている (色部, 2006)。表象レベルの愛着への注目について金政 (2003) は、「成人においては、幼児のように愛着対象の不在に対して泣き叫ぶといった顕在性の高い行動で抵抗を示すこともなければ、自身の欲求充足の遅延に対して激しい怒りや悲しみを表出することも極めて稀である」と説明している。こうしたことから、成人愛着研究においては、外部から観察することの困難さや出現

頻度の少なさとといった課題を抱える行動レベルの愛着に代わって、表象レベルの愛着を測定対象としている。

成人愛着研究は、Hazan, C. et al. (1987) が愛着理論を成人に適用したことから始まった。彼女らは、Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) が提唱した幼児の3つの愛着スタイルに基づき、成人における愛着スタイルの3類型モデル（回避型、安定型、アンヴィバレント型）を提案した。そしてその後、心的表象に注目した成人愛着研究として、Bartholomew, K. et al. (1991) が Bowlby, J. の「内的作業モデル (Internal Working Model: IWM)」の概念を取り上げた。IWM とは、Bowlby, J. (1973) によれば、「他者（主に愛着対象）が自分の援助や保護の求めに対して応じてくれる人物なのか、自分が他者（特に愛着対象）から援助や保護をしてもらえぬ人物なのかについての表象」と定義されている。また、金政 (2003) は IWM について、早期の愛着関係において「個人は養育者（愛着対象）との継続的な相互作用を通して、その関係や愛着対象に対する主観的な信念や期待といった表象、内的な作業モデルを発達させていく。また、そのような自分を取り巻く環境や愛着対象への信念や期待は、同時に自身に関する表象の形成にも影響を与える」と説明を加えている。すなわち、成人の愛着研究は行動レベルの愛着を成人に適用するところから始まり、次いで早期の愛着関係を基盤として形成された自己・他者に対する IWM の存在を想定し、それらのモデルに焦点化することで発展してきたのである。

行動レベルから表象レベルの愛着へという測定対象の変化に伴い、その測定方法も Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) のような観察法から自己報告型の尺度法やインタビュー法へと変遷してきた（金政、2003）。成人愛着スタイルを量的に測定するための尺度作成にあたり、Bartholomew, K. et al. (1991) は自己についての IWM を「自己観」、他者についての IWM を「他者観」と表現している。加えて彼女らは、自己観・他者観がそれぞれネガティブかポジティブかによって愛着スタイルを4つに分類するという2次元・4類型モデルを提唱した。この成人愛着スタイルを類型化するうえで2つの次元となるのは、自己観のネガティブさに対応する「見捨てられ不安 (Anxiety)」と、他者観のネガティブさに対応する「親密性の回避 (Avoidance)」という次元である。そして、この2次元の組合せによって成人の愛着スタイルは、自己観・他者観がともにポジティブな「安定型 (Secure)」、自己観がポジティブで他者観がネガティブな「拒絶型 (Dismissing)」、自己観がネガティブで他者観がポジティブな「とらわれ型 (Preoccupied)」、自己観・他者観がともにネガティブな「恐れ型 (Fearful)」の4つのタイプに分類される（図1）。今日、成人愛着スタイルを測定するうえではこの2次元・4類型モデルが頻繁に用いられている（中尾ら、2006a；山口、2009）。また、このモデルの有用性については中尾 (2012a) が、このモデルと Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) が明らかにした幼児の愛着行動パターンの3類型（回避型、安定型、アンヴィバレント型）が概念的に重なり合う

ことや、2つの次元により概念化を行うことが容易であることといった根拠を挙げている。

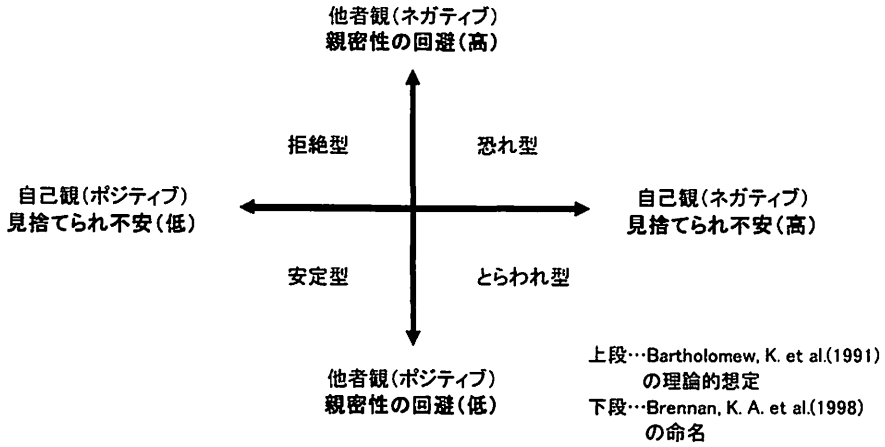


図1. 愛着スタイルの2次元・4類型モデル(Bartholomew, K. et al.(1991), Brennan, K. A. et al.(1998), 中尾(2010)を参考に筆者が作成)

成人愛着スタイルに関する先行研究は多岐にわたっている。例えば、パーソナリティ特性の分野では、愛着スタイルの違いと恋人に対する依存のしやすさについての研究(片岡ら、2008)や、愛着スタイル別に自己と他者の評定間の不一致を扱った研究(中尾、2012b)などが挙げられる。そして、行動特性の分野では、「成人の愛着スタイルは、成人の愛着行動パターンの違いを反映する」という前提に立った研究がある。その中では、乳幼児期の愛着行動に相当するような愛着行動パターンの違いが成人愛着スタイルごとにみられるかを探ったもの(中尾ら、2006a)や、愛着行動の内容を分析したもの(中尾ら、2001)などが挙げられる。

1-2. 対人欲求研究の概観

菅原(1986)は、対人態度の背後に、異なる2種類の欲求である「賞賛されたい欲求」と「拒否されたくない欲求」が存在するとした。これらの欲求を仮定するにあたり、彼は公的自意識に関する過去の研究を取り上げるところから始めている。

まず、公的自意識とは、Fenigstein, A. et al. (1975)によれば、自意識(self-awareness)に関する個人差において「自己の外的・対人的側面に注意を向けやすい傾向」とされている。併せて、彼らは「自己の内面に注意を向けやすい傾向」を私的自意識とし、自意識におけるこれら2つの次元を見出した。その中でも、公的自意識に関する先行研究では、この傾向が強い人ほど他者からの評価的フィードバックに対して敏感であり(Fenigstein, A.,1979)、化粧や服装に対する関心が強いといった結果が示されている(菅原ら、1985; Solomon, R. et al.,1982)。ま

た、公的自意識とこうした対外的な積極性に関連がみられる一方で、鍋田ら(1986)は、むしろ消極的な対人態度と関連がみられる対人恐怖者において公的自意識が非常に強いレベルであるという結果を示している。こうした結果から菅原(1986)は、公的自意識の強い人が上記のような「自己顕示的な対人態度」と「消極的で内気な対人態度」という「極めて対立的な2つの対人態度」を持ち得ることに注目した。さらに彼は、Carver, C. S. et al. (1981)による、目標の内容が行動のコントロールの方向性を規定するといった目的論的な枠組みに注目した。こうして菅原(1986)は、「公的自意識の強い人は2つの異なった対人的目標を持っており、それぞれの目標が他者に対して積極的な自己イメージと消極的な自己イメージとを演出させている」という仮説を生成した。

また菅原(1986)は、公的自意識に近い研究領域のひとつとして、自己呈示に関する研究に着目した。それは、自己呈示の研究領域において、自己演出という視点から泉本ら(1984)が、対人態度を媒介し自己演出を方向づける欲求として「他者に肯定されたい欲求」と「他者に否定されたくない欲求」の存在を示唆していたからである。こうした示唆を受けた菅原(1986)は、対人的目標を「欲求」という概念へ置き換えることにより、対人態度に関する研究を自己呈示に関する研究領域へと接近させていった。

これらの過去の研究結果や理論的背景を踏まえて菅原(1986)は、対人態度の背後には、それを方向づける「賞賛されたい欲求」と「拒否されたくない欲求」の2つの欲求が存在すると仮定した。そして、彼はこれらの欲求を概念化し、各欲求を測定するための量的尺度を作成するに至った。さらに菅原(1986)は、先述したような公的自意識の強い人が対極な対人態度を示すという点について、この2つの欲求の視点から説明を試みている。彼によると、「一般に公的自意識の強い者はこれら欲求のいずれもが強い」と考えられるが、両欲求は「他者の“まなざし”に対して正反対の態度を方向づける」といえる。そのため、このような両欲求が同一個人の中にみられるということについては、「1つの可能性として、彼らはその時々の状況や対する相手との関係によって2つの自己呈示のストラテジーを使い分けていると見ることもできる」という見解が述べられている。

その後の研究において、菅原(1986)の尺度の問題点を指摘した渡部(1999)は、対人態度の背後に新たな欲求を想定した尺度を作成した。渡部(1999)は、賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求の他に、「対人関係から逃避することによって、他者からの直接的な拒絶や批判を回避し、自己を防衛している」可能性のある群を指して、「他者との関係を回避する欲求」の存在を主張している。そして、「他者から賞賛されたい欲求(賞賛尺度)」「他者から拒否されたくない欲求(非拒否尺度)」「他者との関係を回避する欲求(回避尺度)」の3つの欲求を対人欲求として提唱した。また彼は、対人欲求のあり方について、「非拒否尺度と回避尺度間で

相関が若干高いものの、他の下位尺度間では予想どおり相関は低い」として、「三つの対人欲求は明確に独立した欲求である」と結論づけている。その上で、彼は、菅原（1986）による公的自意識が強い人の中には正反対の欲求が同時に存在するという主張に対して、3つの欲求は独立しているという観点から「彼らの中に三つの独立した対人欲求のうちいずれかが強く存在する」という新たな見解を述べている。

1-3. 目的

先述したように、成人愛着研究においては成人の愛着行動パターンについての研究がなされている（中尾ら、2001；中尾ら、2006b）。その目的は、成人の愛着スタイル、すなわち IWM における自他の表象のあり方から、乳幼児期の延長として想定される愛着行動パターンの存在を探るというものである。しかし他方で、成人愛着研究の対象が行動レベルから表象レベルの愛着へ変遷していった過程を考慮するならば、行動を起こす背後にある動機づけや欲求もまた、IWM における自他の表象のあり方と関連があるものと推測できる。

こうしたことから、成人愛着スタイルと愛着行動との間に関連性がみられるということは前提としたうえで、筆者は、そこに生じているはずの欲求、中でも関係性の理論である愛着理論においては対人場面で生起される欲求と成人愛着スタイルの間にも関連性がみられるものと推察する。そこで本研究では、IWM における自他の表象と対人場面で生起される欲求との関連について研究を行うところから始め、そこから新たな問いの探求を目指すこととする。

2. 方法

2-1. 質問紙の構成

本研究における質問紙は、フェイスシート、成人愛着スタイルの測定尺度、対人場面で生起される欲求の測定尺度の3つから構成されており、全62項目であった。フェイスシートではまず本研究の倫理的配慮について記載し、そのうえで本質問紙調査への協力の意思を確認する欄を設けた。その後年齢、性別、回生についての記述を求めた。各尺度の詳細については以下のとおりであった。

2-2. 成人愛着スタイルの測定尺度について

成人愛着スタイルの2因子である「見捨てられ不安」「親密性の回避」を測定するために、「親密な対人関係体験尺度（Experiences in Close Relationships inventory：ECR）」（Brennan, K. A. et al.,1998；中尾ら、2004b）の一般他者版である「ECR-GO」（中尾ら、2004a）を用いた。愛着スタイルを測定するための尺度には、ECRのように特定の愛着対象（恋人、家族など）を想

起して回答していくものと、ECR-GOのように特定の対象ではなく一般化された他者を想定して回答していくものがある。その中でも、ECR-GOは特定の対象・場面に限られない、より日常的な自己観・他者観を測定できる尺度とされている(中尾ら, 2004a)。ECR-GOの項目数は36であり、7件法(「1. 全く当てはまらない」から「7. 非常によく当てはまる」)を用いた。

2-3. 対人場面で生起される欲求の測定尺度について

渡部(1999)の「対人欲求尺度」を用いた。本尺度は、「賞賛尺度」「非拒否尺度」「回避尺度」の3因子からなる。また、本尺度にある「他者」については、特定の対象が設定された研究は見当たらない(渡部, 1999; 滝上ら, 2006)。このことから、本尺度における他者とはより一般化された他者を指すものと推察できる。したがって、本研究においては、一般他者を想定しているという点でECR-GOと共通した性質がみられる本尺度の使用は適切であるといえる。対人欲求尺度の項目数は26であり、5件法(「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常によく当てはまる」)を用いた。

2-4. 調査時期と調査対象

本調査は、2015年10月から11月にかけて、近畿圏内の大学生301名(男性116名、女性185名)を対象に行った。調査対象者の平均年齢は19.97歳($SD=1.66$)であった。

2-5. 分析方法

統計的分析には、度数分布、記述統計(平均値、標準偏差、最大値、最小値、天井効果、フロア効果)、最小二乗法・Promax回転における因子分析、主因子法・Promax回転における因子分析、Cronbachの α 係数、相関分析、 t 検定、分散分析、多重比較(Bonferroni法)を行った。

3. 結果

3-1. ECR-GOの因子分析と信頼性の検討

各項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果、フロア効果を確認した結果、いずれの項目にも天井効果、フロア効果はみられなかった。そこで全項目を対象に重みなし最小二乗法を用いたPromax回転を採用し因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.40未満となった5項目(7, 13, 21, 33, 34)を除外対象とした。ただし、項目21「私は、自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う。」と項目34「人にダメだなあとと言われると、自分は本当にダメだなあと感じる。」の因子負荷量は.39であり、手続き上因子負荷量の不足として除

外したが如実に低い値というわけではなかった。また項目7「私は、人が自分に対して非常に親密になりたがってくると、とてもいごち悪く感じる。」、項目13「私は人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう。」、項目33「困ったとき人に助けを求めると、何かちょっとは(状況が)よくなる。(逆転項目)」については、これらの項目は中尾ら(2004a)の時点で解釈可能性を問われた項目であり、本研究においてもそうした不明瞭さが項目の因子負荷量に影響を与えたものと推測する。

上記の項目を除外し再度因子分析を行った結果を表1に示す。除外項目を除き、抽出された因子の内容が中尾ら(2004a)の結果と合致したため、彼らに倣い第1因子を「見捨てられ不安」、第2因子を「親密性の回避」と命名した。また、表1の因子構造に従って各因子におけるCronbachの α 係数を算出した結果、いずれの因子にも高い信頼性が得られた(表1)。さらに、ECR-GOの因子間相関についてはほとんど相関がみられなかった。こうした信頼性や因子間相関の程度も中尾ら(2004a)の結果と重なることから、本研究における本尺度の内容の妥当性は追認できたといえる。

表1. ECR-GOの因子構造と信頼性、因子間相関

	因子	
	見捨てられ不安	親密性の回避
第1因子：見捨てられ不安 ($\alpha = .91$)		
18. 私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言うてくれることが必要だ	.76	.00
8. 私は、知り合いを失うのではないかと心配している	.73	.19
14. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.71	.08
30. 私は、私がいってほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう	.68	-.30
2. 私は、見捨てられるのではないかと心配だ	.67	.17
6. 私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する	.67	.15
16. 私がとても親密になりたいと強く望むために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう	.63	-.04
24. 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、私はきつと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする	.61	-.19
4. 私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している	.61	.26
32. 私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする	.59	-.30
28. 私は誰かとつき合っていないと、何となく不安で不安定な気持ちになる	.58	-.31
10. 私はいつも、人が私に対していてくれる気持ちが、私に人に対していてくれる気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う	.57	-.13
12. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう	.57	-.05
22. 私は、(知り合いに)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない(R)	.56	.13
20. 私は、人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる 때가ときどきある	.52	-.19
36. 私は、知り合いが私のことをほっといて自分一人が何かをすることが重なってくる腹が立ってきってしまう	.51	-.25
26. 私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う	.48	.25
11. 私は人と親密になりたいのだが、いつの間にかついつい後ずさりしていることが多い	.47	.35
第2因子：親密性の回避 ($\alpha = .83$)		
9. 私は人に心を開くのに抵抗を感じる	.24	.62
25. 私は、人に何でも話す(R)	-.14	.62
15. 私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない(R)	-.02	.60
31. 私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない(R)	-.08	.54
19. 私は比較的容易に人と親密になれると思う(R)	.02	.51
23. 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない	.00	.51
29. 私は人に頼ることに抵抗がない(R)	-.06	.50
17. 私は人とあまり親密にならないようにしている	.24	.50
3. 私は、人と親密になることがとてもこちよ(R)	-.13	.49
1. 心の奥底で何を感じているのかを人にみせるのはどちらかというと好きではない	.01	.49
35. 私は、なぐさめやげましなど、いろんなことで助けを求める(R)	-.36	.48
5. 人が私と親密になろうとするやいなや、私はその人から距離をとろうとしている自分に気づく	.40	.45
27. 私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う(R)	-.27	.44

*Rは逆転項目

因子相関行列		
因子	見捨てられ不安	親密性の回避
見捨てられ不安	1.00	0.13
親密性の回避	-	1.00

3-2. 対人欲求尺度の因子分析と信頼性の検討

各項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果、フロア効果の確認を行った結果、項目14「できるだけ敵は作りたくない。」と項目25「自分を嫌っている人とはなるべく顔を合わせたくない。」に天井効果がみられた。これらの項目については、両項目に「敵」「自分を嫌っている人」といった否定的な他者の想定がみられる。そのため、そうした敵対する存在に対して人は「敵は作りたくない」「なるべく顔を合わせたくない」といった回避的な思いを抱きやすいことがうかがえる。そこでこれら2項目を除外した24項目について、主因子法を用いたPromax回転を採用し因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.40未満となった3項目(項目13「みんなから“変な人”だと思われたくない。」、項目21「たとえば人から批判される可能性の高いぎこぎこのような場面には、最初からなるべく近づきたくない。」、項目24「何かにつけて批判するような人たちとのつきあいは、なるべく避けたい。」)を除外対象とした。こうした結果からは、今後本尺度を使用していくにあたって項目を精査する余地があるといえる。

上記の項目を除外し再度因子分析を行った結果を表2に示す。除外項目を除き、抽出された因子の構造が渡部(1999)の結果と合致したため、彼に倣い第1因子を「他者から賞賛されたい欲求(賞賛尺度)」、第2因子を「他者から拒否されたくない欲求(非拒否尺度)」、第3因子を「他者との関係を回避する欲求(回避尺度)」と命名した。また、表2の因子構造に従って各因子におけるCronbachの α 係数を算出した(表2)。その結果、「賞賛尺度」「非拒否尺度」では高い信頼性が得られたが、「回避尺度」の信頼性についてはやや不十分な値が得られた。「回避尺度」の信頼性については、因子分析の過程で「回避尺度」の下位項目のうち約半分が削除されたことによる影響や、次に述べる因子間相関の影響があったものと推察する。ただし、「回避尺度」の信頼性は $\alpha = .65$ と如実に低い値ではないため、「回避尺度」が対人欲求の因子の一つであるという見方は継続できるものと判断する。

因子間相関については、「賞賛尺度」と「非拒否尺度」の間に弱い正の相関が、「非拒否尺度」と「回避尺度」との間に比較的強い正の相関がみられた。こうした結果は、相関の程度が異なるものの渡部(1999)の結果と合致する。したがって、本研究における本尺度の内容の妥当性は概ね追認できたとはいえる。

表2. 対人欲求尺度の因子分構造と信頼性、因子間相関

	因子		
	賞賛尺度	非拒否尺度	回避尺度
第1因子：賞賛尺度 ($\alpha = .91$)			
5. 人に自分を印象づけたい	.82	.00	-.02
7. みんなから尊敬される人になりたい	.76	.02	-.09
6. 有能な人間だと、まわりから認められたい	.76	-.08	.15
2. みんなの注目をあびたい	.72	-.04	-.05
1. みんなの人気者になりたい	.72	-.02	-.05
4. 何か気のきいたことを言って人を感心させたい	.72	.06	.09
8. 社会で高く評価されるようなことをしたい	.71	-.01	-.09
3. 人前ではいつもかっこよくありたい	.69	-.06	.07
10. 自分の得意なこと（スポーツ・勉強など）をまわりの人にみてもらいたい	.68	.00	.09
9. みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	.58	.13	-.14
第2因子：非拒否尺度 ($\alpha = .85$)			
17. 自分の考えよりも自分の所属する集団の和を優先させたい	-.06	.78	-.12
18. 自分を変える努力をしても周囲の人とうまくやっていきたい	-.02	.75	-.09
15. 自分がしたいように行動するよりも、周囲の人から好まれるように行動したい	-.08	.68	.01
11. どんな時でも相手の機嫌をそこねたくない	.07	.66	.05
19. 人の感情を害しないかと心配なので、他の人の言うことに強く反ばつすることはしたくない	-.03	.65	.22
12. 誰からも嫌われたくない	.16	.60	.02
16. 人の批評めいたことはあまり言いたくない	.00	.46	-.08
第3因子：回避尺度 ($\alpha = .65$)			
26. 人からの拒否や批判を避けるためには、たとえ人とあまりかかわることができなくなってもしょうがない	-.04	-.10	.65
20. 人と深く関わるほど自分の嫌な部分を相手に知られそうで、積極的に人と深くかかわりたいと思わない	-.13	.00	.61
22. 断られるのが心配なので、誰かに頼み事をあまりしたくない	.06	.18	.57
23. 一緒にどこかに行こうと誘って断られたら、もう一度誘ってみる気にならない	.07	-.08	.47
因子相関行列			
因子	賞賛尺度	非拒否尺度	回避尺度
賞賛尺度	1.00	0.30	0.19
非拒否尺度	-	1.00	0.52
回避尺度	-	-	1.00

3-3. 尺度間の相関分析

ECR-GOにおける2因子と対人欲求尺度における3因子について、それぞれの相関の程度を調べるために相関係数を算出した(表3)。その結果、「見捨てられ不安」と「賞賛尺度」「非拒否尺度」「回避尺度」との間にいずれも有意な正の相関がみられた。また、「親密性の回避」と「回避尺度」との間には有意な正の相関がみられた。さらに、「親密性の回避」と「賞賛尺度」との間には有意にほとんど相関がみられないという結果になった。

次に、尺度ごとの因子間の相関関係について、ECR-GOの下位因子間ではほとんど相関がみ

られないという結果になった。また、対人欲求尺度の下位因子間では、「賞賛尺度」と「非拒否尺度」の間、「非拒否尺度」と「回避尺度」の間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。さらに「賞賛尺度」と「回避尺度」の間には有意にほとんど相関がみられないという結果になった。

表3. ECR-GOと対人欲求尺度における下位因子間の相関($n=301$)

	見捨てられ不安	親密性の回避	賞賛尺度	非拒否尺度	回避尺度
見捨てられ不安	1.00	0.10	0.33**	0.39**	0.47**
親密性の回避	-	1.00	-0.15**	0.04	0.43**
賞賛尺度	-	-	1.00	0.27**	0.13*
非拒否尺度	-	-	-	1.00	0.38**
回避尺度	-	-	-	-	1.00

** $p < .01$ * $p < .05$

また、相関係数によって示された関係性について補填するために、因子得点の視点からも比較・検討を行った。ECR-GOにおける「見捨てられ不安」「親密性の回避」の因子得点をもとに、全体を高群・低群に分類し、二群間で対人欲求尺度の得点に差がみられるかを確認した(表4)。群分けについては、ECR-GOの各因子における全体の因子得点の平均+標準偏差($M+1SD$)よりも得点の上回った群を高群、平均-標準偏差($M-1SD$)よりも得点の下回った群を低群とし、それ以外の中間群の得点は考慮しないこととした。

高群・低群間で各対人欲求の得点を比較したところ、「見捨てられ不安」においては、いずれの対人欲求についても、高群の方が低群よりも有意に得点が高いことが示された。また、「親密性の回避」においては、「賞賛尺度」得点は低群の方が高群よりも有意に高く、「回避尺度」得点は高群の方が低群よりも有意に高いことが示された。

表4. ECR-GOの各因子得点による高群・低群別の平均と標準偏差、 t 値

	見捨てられ不安		t 値	親密性の回避		t 値
	$M(SD)$			$M(SD)$		
	高群($n=45$)	低群($n=55$)		高群($n=46$)	低群($n=46$)	
賞賛尺度	36.87(6.11)	29.15(11.99)	$t(83.44)=4.16, p < .01$	30.37(8.90)	35.17(9.52)	$t(90)=2.50, p < .05$
非拒否尺度	26.20(5.44)	19.67(6.26)	$t(98)=5.50, p < .01$	23.24(6.63)	21.98(6.38)	$t(90)=0.93, p < n.s.$
回避尺度	14.22(2.58)	9.76(3.47)	$t(98)=7.14, p < .01$	13.93(3.02)	9.39(2.79)	$t(90)=7.49, p < .01$

3-4. 成人愛着スタイルによる分散分析

3つの対人欲求の因子得点について、ECR-GOの2次元の組合せにより分類される4つの愛着スタイル間で差がみられるかを検討するために、一元配置分散分析を行った。愛着スタイルの分類については、相関分析の際の高群・低群を参考に、この二群の組合せによって4タイプへの分類を試みた。4タイプとは、「安定型(見捨てられ不安:低群、親密性の回避:低群)」「拒絶型(低群、高群)」「とらわれ型(高群、低群)」「恐れ型(高群、高群)」である。しかしな

がら、上記の分類方法では「安定型」が17名、「拒絶型」が9名、「とらわれ型」が4名、「恐れ型」が9名となり、各群の人数の少なさや群間の人数差から分散分析には適さないものと判断した。

そこで次に、「見捨てられ不安」「親密性の回避」の因子得点について、それぞれ全体の因子得点の平均 (M) よりも得点の上回った群を高群、平均 (M) よりも得点の下回った群を低群として、この二群の組合せによって上記の4タイプへの分類を行った。分散分析の結果を表5に示す。その結果、いずれの対人欲求の因子得点においても群間の差は有意であった。

表5. 成人愛着スタイルごとの各対人欲求尺度の平均値と標準偏差、F値

	安定型 ($n=79$)	拒絶型 ($n=73$)	とらわれ型 ($n=69$)	恐れ型 ($n=80$)	F値
賞賛尺度	$M(SD)$ 32.01(9.30)	29.42(9.77)	35.42(6.63)	35.11(6.66)	$F(297)=8.68, p<.01$
非拒否尺度	$M(SD)$ 20.89(6.18)	21.43(5.56)	25.25(4.82)	24.84(5.27)	$F(297)=12.79, p<.01$
回避尺度	$M(SD)$ 9.68(2.88)	11.51(3.02)	12.38(2.35)	13.78(2.73)	$F(297)=30.58, p<.01$

そこで多重比較 (Bonferroni 法) を行ったところ、まず「賞賛尺度」においては、「とらわれ型」「恐れ型」が「拒絶型」に比べて有意に得点が高かった ($p<.05$)。また「非拒否尺度」においては、「とらわれ型」「恐れ型」が、「安定型」「拒絶型」に比べて有意に得点が高かった ($p<.05$)。そして、「回避尺度」においては、「恐れ型」がその他の愛着スタイルに比べて有意に得点が高く ($p<.05$)、さらに「安定型」がその他の愛着スタイルに比べて有意に得点が低かった ($p<.05$)。

4. 考察

4-1. ECR-GO と対人欲求尺度の相関について

ECR-GO の2次元「見捨てられ不安」「親密性の回避」と、3つの対人欲求「他者から賞賛されたい欲求」「他者から拒否されたくない欲求」「他者との関係を回避する欲求」の相関関係について考察する。

4-1-1. 「見捨てられ不安」と対人欲求の相関分析

「見捨てられ不安」は3つの対人欲求との間にいずれも有意な正の相関関係を示した。また、渡部 (1999) の「三つの対人欲求は明確に独立した欲求である」という主張を考え合わせると、自己観がネガティブな人ほど3つの対人欲求の中のいずれかを強く持つ傾向があるといえる。

自己観がネガティブという点で共通する群において異なる3つの傾向が示されたわけであるが、先述したように、IWMにおける自己観がネガティブということは、「自分が他者 (特に愛着対象) から援助や保護をしてもらえる人物なのか」(中尾、2012a) という期待や信念が否定

的ということである。したがって、自己観がネガティブな人は、自身に否定的でありながら他者からの賞賛を得たいという両価的な思いや、他者から拒否されることを恐れる思い、対人関係を回避したいという思いといった多様な思いを抱き得るといえる。

各対人欲求の特徴について、菅原（1986）は、賞賛されたい欲求の強い人は「積極的に行動し他者の注目を集める」ことで、拒否されたくない欲求の強い人は「個性を殺し周囲との軋轢を最小限にする」ことで、「集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとする」という特徴がみられると論じている。また、対人態度と対人欲求という視点から滝上ら（2006）は、「賞賛尺度」得点または「非拒否尺度」得点の高い人ほど「対人場面において愛想が良く、人から『明るく』見えるであろう態度」（ポジティブ態度）をとると述べている。それに対して、「回避尺度」得点の高い人ほど「対人関係を避けたり、人から『暗く』見えるであろう態度」（ネガティブ態度）をとると述べている。

第一に、「他者から賞賛されたい欲求」について、こうした欲求が強い人ほど対人場面では愛想良く見えるポジティブ態度をとりやすく、積極的に他者と関わる傾向があるといえる。しかし一方で、対人態度と対人ストレスという視点から滝上ら（2006）は、ポジティブ態度をとる人は「人間関係がうまくいかないと頻繁に感じ、そのことをストレスに感じている」という特徴を述べている。ここでいう対人関係のうまくいかなさとは、「対人関係において劣等感を触発する事態やスキルの欠如」（会話中に気まずい沈黙があったなど）に関する「対人劣等」のストレスイベントを指す（橋本、1997）。また、滝上ら（2006）はこうしたポジティブ態度と対人ストレスとの関連を受けて、ポジティブ態度をとる人の中には無理せずポジティブ態度をとる人と、意識的にポジティブ態度を用いる人がいると主張している。そして後者の、手段としてポジティブ態度を用いる人に対人ストレスを感じやすいという心性がみられるのではないかと論じている。彼女らの主張をまとめると、対人関係を上手くいかせる手段としてポジティブ態度を用いる人ほど、関係の中で自身の劣等感が触発される事態を体験しやすく、対人関係においてストレスを感じやすいということである。ここで、対人関係の中で自身の劣等感が触発されやすいということは、その場のうまくいかなさや不全感の原因を自身に求める傾向があると理解できる。そのため、そこには否定的な自己像の存在が想定される。したがって、こうした否定的な自己像が ECR-GO における「見捨てられ不安」、すなわち他者からの拒絶を恐れる傾向に関係しているものと推察する。

ここで改めて「見捨てられ不安」と「他者から賞賛されたい欲求」の関連をみたとき、自己観がネガティブな人ほど対人場面で劣等感を感じやすく、一方ではポジティブ態度を用いることで周囲から賞賛を得ようとする傾向がうかがえる。このことから、自己観がネガティブな人にとって、他者から賞賛を受けるということは否定的な自己観を補うための要因になるのでは

ないかと推察する。

第二に、「他者から拒否されたくない欲求」について、こうした欲求が強い人ほど対人場面ではポジティブ態度をとりやすく、自身を押し殺してでも周囲に合わせようとする傾向があるといえる。また「賞賛尺度」の場合と同様に、拒否されたくない欲求が強い人も対人劣等を頻繁に感じやすいことが示されている（滝上ら、2006）。他方で、「賞賛尺度」と「非拒否尺度」の違いについて渡部（1999）は、対人的コンピテンス（対人場面における自信）という視点から、「他者から賞賛されたい欲求」が強い人は自身の対人的コンピテンスを高く認知する傾向があるのに比べて、「他者から拒否されたくない欲求」の強い人は自身の対人的コンピテンスを低く認知する傾向があると述べている。ここで、対人的コンピテンスの低さ、すなわち自信のなさは、否定的な自己像という点で先述した劣等感と近い性質のものと理解できる。したがって、こうした対人的コンピテンスの低さが「見捨てられ不安」における他者からの拒絶を恐れる傾向と関係しているものと推察する。

上記の点を踏まえて「見捨てられ不安」と「他者から拒否されたくない欲求」の関連をみたとき、自己観がネガティブな人にとって他者から拒否されることは自信が低下し、自己観のネガティブさが触発される要因になるのではないかと推察する。言い換えれば、自己観がネガティブな人は今以上に自己観のネガティブさを増長させたくないために、または自己観のネガティブさに直面したくないために他者から拒否されたくないという思いを抱くのもかもしれない。

第三に、「他者との関係を回避する欲求」については、こうした欲求が強い人ほど対人場面では暗く見えるネガティブ態度をとりやすく、対人関係を避ける傾向があるといえる。したがって、先述した2つの対人欲求とは異なり、「他者との関係を回避する欲求」と対人態度の間には一貫して回避的な方向性がうかがえる。また、対人ストレスの視点から滝上ら（2006）は、ネガティブ態度をとる人ほど対人関係において対人摩耗を頻繁に体験し、対人劣等と対人葛藤を感じやすいと述べている。対人摩耗とは「社会規範からさほど逸脱したものではないが配慮や気疲れを伴う対人関係がストレスをかけている事態」（あまり親しくない人と会話したなど）であり、対人葛藤とは「日常生活でときどき起こる、社会の規範からは望ましくない顕在的な対人葛藤」（けんかした、約束を破られたなど）を指す（橋本、1997）。これらの特徴から、「他者との関係を回避する欲求」が強い人は現実の対人場面において葛藤や気疲れといったストレスを頻繁に感じているため、そうした場面を回避したいと思うのではないかと推察する。

一方で、渡部（1999）は「他者との関係を回避する欲求」が強い人の特徴について、「その根底には他者との関係を全く断絶させてしまうのではなくて、非常に消極的な方法にせよ対人関係を維持しようとする動機づけが働いているのではないかと論じている。また彼は、「他者との関係を回避する欲求」が強い人は他の対人欲求が強い人と比べて自身の社会的スキルや

対人的コンピテンスへの認知が低いという特徴を挙げている。そして、その上で渡部（1999）は、彼らにみられる回避的な態度を「他者との関係を自分なりに維持したり、対人関係の中で自己を防衛しながら、集団の中に自分の居場所を確保するために、自己選択した態度である」と述べている。これらの主張からは、「他者との関係を回避する欲求」が強い人であっても集団への帰属を求める思いがあること、しかし社会的スキルや対人的コンピテンスへの自己認知が低いため対人関係に回避的・防衛的になり、結果消極的な在り方で対人関係を維持せざるを得ないことが想定できる。

以上のことから、「他者との関係を回避する欲求」が強い人には、対人関係をなるべく回避したいという思いを持っている可能性と、一方で消極的なかたちであれ他者との関係を持ちたいという思いを持っている可能性が示唆された。ここで、「見捨てられ不安」と「他者との関係を回避する欲求」の関連をみたとき、前者の可能性では対人劣等を感じやすいという点において、後者の可能性では認知された対人的コンピテンスが低いという点において、それぞれ自己観のネガティブさとの関連性がうかがえる。そのため、いずれの場合であっても自己観がネガティブな人ほど他者との関係を回避したいという思いを強く持つものと推察する。または、対人関係の中で自身の劣等感が触発される事態や、自信のなさが露呈する事態を避けるために、回避したい欲求は強くなるのかもしれない。

4-1-2. 「親密性の回避」と対人欲求の相関分析

「親密性の回避」は「回避尺度」との間に有意な正の相関関係を示し、「賞賛尺度」との間に有意な負の相関関係を示した。これらのことから、他者観がネガティブな人ほど「他者との関係を回避する欲求」を強く持ち、「他者から賞賛されたい欲求」は弱くなる傾向があるといえる。

先述したように、IWMにおける他者観がネガティブということは、「他者（主に愛着対象）が自分の援助や保護の求めに対して応じてくれる人物なのか」（中尾、2012a）という期待や信念が否定的ということである。したがって、他者観がネガティブな人は、他者との関係を回避したいという思いを抱きやすく、またそうした相手から賞賛されることを求めないといえる。

第一に、「他者との関係を回避する欲求」については、先述したように対人場面でネガティブ態度をとりやすく、そうした態度をとる人ほど他者の言動や関係性に起因したストレスイベントである対人葛藤や対人摩擦を体験しやすいという傾向が挙げられる（滝上ら、2006）。これらのことから、「他者との関係を回避する欲求」の強い人ほど、対人関係を自身にとってストレスの強いものであると感じていることがうかがえる。そして専ら、そのストレスは他者の言動や他者との関係性から生じるものであり、こうしたストレスへの敏感さと「親密性の回避」、

すなわち他者観のネガティブさが関係しているものと推察する。

以上のことから、「親密性の回避」と「他者との関係を回避する欲求」の関連をみたとき、他者観がネガティブな人ほど、他者に抱くネガティブな表象が相まって対人関係にストレスを感じやすく、そのためそうした場面をなるべく回避したいという欲求が強いものと推察する。加えて、いずれの対人欲求が強い人の場合も「他者を意識する傾向が高い」という渡部(1999)の主張を考え合わせると、他の2つの対人欲求とは異なり、「他者との関係を回避する欲求」が強い人はストレスを与えてくるネガティブな対象として他者を意識する傾向が高いのかもしれない。

第二に、「他者から賞賛されたい欲求」については、「親密性の回避」との間に有意な相関関係がみられたものの、相関係数の低さからほとんど相関関係はみられないという結果であった。ただし、相関分析の補填として「親密性の回避」得点の高群・低群間で「賞賛尺度」得点を比較したところ、低群の方が高群よりも有意に得点が高いことが示された。このことから、より明確に他者観がポジティブな人と他者観がネガティブな人を比較した場合には、他者観がポジティブな人の方が賞賛されたい欲求を強く持つといえる。

先述したように、他者観がネガティブな人ほど対人関係を回避したい欲求が強く、対人場面ではネガティブ態度をとる傾向がうかがえる。そしてその理由のひとつに、彼らは他者や関係性に起因するストレスを感じやすいという特徴を挙げてきた。ここで、翻って他者観がポジティブな人の特徴を考えると、他者観がポジティブな人ほど対人場面ではネガティブ態度をとる傾向が少なく、他者に起因するストレスを感じにくいといえる。次に、「他者から賞賛されたい欲求」が強い人は対人場面でポジティブ態度をとりやすいが、他方で自身の劣等感に起因するストレスを感じやすいという特徴もみられる。そのため、彼らが賞賛を求める理由のひとつには、自己観のネガティブさを補う要因として他者から賞賛されることに肯定的価値を見出しているのではないかと考察してきた。ここで、他者からの賞賛に肯定的価値を見出しているということは、その主体である他者もまた肯定的に捉えているものと想定できる。すなわち、他者観がポジティブであると言い換えられる。

以上のことを踏まえて「親密性の回避」と「他者から賞賛されたい欲求」との関係性についてみたとき、「他者から賞賛されたい欲求」が強い人ほど他者の存在を肯定的に捉えており、そうした他者から賞賛されることについても肯定的価値を見出しているといえる。翻って、他者観がネガティブな人ほど他者からの賞賛に肯定的価値を見出しておらず、または他者から賞賛されてもそれを自身の中で肯定的に意味づけることが難しいのではないかと推測する。例えば、他者からの評価に関心であることや、他者からの賞賛を皮肉やプレッシャーとして感じやすいのではないかとということである。ただし、両者の相関の程度が弱かったことから、他者

観のネガティブさは「他者から賞賛されたい欲求」を左右する要因のひとつではあるが、賞賛を求める思いは自己観のネガティブさに拠るところの方が大きいといえる。

4-2. 成人愛着スタイルの4類型による分散分析について

ECR-GOにおける2次元「見捨てられ不安」「親密性の回避」の組合せにより、成人愛着スタイルの4類型「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」に分類した。各成人愛着スタイルの特徴について、対人欲求という視点から考察する。

4-2-1. 「賞賛尺度」得点における分散分析

「賞賛尺度」においては、「とらわれ型」「恐れ型」が「拒絶型」に比べて有意に得点が高かった。「とらわれ型」「恐れ型」は共に自己観がネガティブな愛着スタイルであることから、「他者から賞賛されたい欲求」は自己観のネガティブさと強く関係しているといえる。このような関係性は、本研究における相関分析の結果からも確認できる。

一方で、自己観がネガティブな「とらわれ型」「恐れ型」と自己観がポジティブな「安定型」の間には有意な得点差がみられなかった。「安定型」と「拒絶型」は共に自己観がポジティブな群であることを考え合わせると、他者観のネガティブさもまた賞賛されたい欲求の程度に関係しているものと推察できる。この点については、相関分析において「親密性の回避」と「賞賛尺度」の相関がほとんどみられなかったものの、「親密性の回避」の高群・低群間の比較では「賞賛尺度」得点に差がみられたことから裏付けることが可能であるといえる。

以上のことを踏まえて、「他者から賞賛されたい欲求」と成人愛着スタイルの関連性をみたとき、他者に依存的な「とらわれ型」が最も賞賛されたい欲求が強いという点は理解しやすい。すなわち、自身に否定的で他者に肯定的なため、他者からの賞賛に肯定的価値を見出し、それを受けることで自己観のネガティブさを補おうとするものと推察できる。対照的に、自律を重んじ親密さに不快感を示す「拒絶型」は、他者に否定的であるため他者からの賞賛に価値を見出せず、そのため賞賛されることを求めないものと推察できる。さらに、自己にも他者にも否定的な「恐れ型」は、自己観のネガティブさから賞賛を求めようとする一方で、他者に懐疑的なため賞賛されたとしてもそれを肯定的に受け止めにくいものと推察できる。これらの3タイプは、成人愛着スタイルにおける不安定型愛着 (insecure) である。これに対して、安定型愛着 (secure) である「安定型」は、自己にも他者にも肯定的であるため、自身の評価に見合った程度に他者から賞賛されることを求めるものと推察できる。加えて、精神的健康と環境への適応感という視点から中尾 (2012b) は、安定型愛着は不安定型愛着に比べて「心理的適応の度合いが高い」という特徴を示している。したがって、自己にも他者にも肯定的な場合に「他

者から賞賛されたい欲求」を抱くのは、心理的適応という視点からみてある程度重要なことであるといえる。それに対して、そうした賞賛を求める思いが否定的な自己観に起因している場合や、賞賛を求める思いが乏しい場合、または賞賛されてもそれを肯定的に受け止めることができない場合には、その個人は心理的適応に困難さを感じているものと推測できる。

4-2-2. 「非拒否尺度」得点における分散分析

「非拒否尺度」においては、「とらわれ型」「恐れ型」が「拒絶型」「安定型」に比べて有意に得点が高かった。このことから、「他者から拒否されたくない欲求」は自己観のネガティブさに関係しており、他者観のネガティブさとは関係がないといえる。このような関係性は、相関分析において自己観がネガティブな人ほど「非拒否尺度」得点が高く、一方で他者観のネガティブさには拠らないという結果からも確認できる。

ところで、成人愛着スタイルの4類型という視点からみると、「とらわれ型」と「恐れ型」は共に自己観がネガティブな群であるが異なる愛着スタイルに分類される。ここで疑問なのは、「とらわれ型」「恐れ型」が共に「他者から拒否されたくない欲求」を強く持つことについて、欲求の方向性は同じであるが、果たして欲求の質まで同じなのかということである。この疑問については、例えば以下のような視点から推測を試みることができる。すなわち、「とらわれ型」は他者に対して依存的であるため、依存の対象である他者を失いたくないという思いから拒否されたくないと感じるのかもしれない。それに対して、「恐れ型」は親密さを求めながらも他者に懐疑的であるため、他者へ不信感を抱きつつも関係を希求したいという思いから拒否されたくないと感じるのかもしれない。

4-2-3. 「回避尺度」得点における分散分析

「回避尺度」においては、自己観・他者観が共にネガティブな「恐れ型」がその他の愛着スタイルに比べて有意に得点が高かった。そして、自己観・他者観が共にポジティブな「安定型」がその他の愛着スタイルに比べて有意に得点が低かった。このような関係性は、相関分析において自己観、他者観がネガティブな人ほど「回避尺度」得点が高いという結果からも確認できる。

このような結果は、言い換えれば、自己観と他者観のいずれかがネガティブな場合に回避したい欲求は強くなるということである。そしてここでも、成人愛着スタイルの4類型という視点からみると、同じ「他者との関係を回避したい欲求」であっても、自己観のネガティブさに基づく回避したい欲求と、他者観のネガティブさに基づく回避したい欲求では欲求の質が異なることが想定できる。例えば、他者観がネガティブな「拒絶型」は、対人ストレスを軽減させ

るために他者を回避したいと感じるのかもしれない。一方で、自己観がネガティブな「とらわれ型」は、劣等感や自信のなさから他者に批判されることを恐れて他者を回避したいと感じるのかもしれない。そして、自己観・他者観が共にネガティブな「恐れ型」は、その両方の側面を持つため回避したい欲求を一層強く抱くのかもしれない。

最後に、自己観・他者観が共にポジティブな「安定型」は、他者を回避したい欲求が弱い。こうした傾向は、渡部（1999）による「社会的スキルや対人的コンピテンスが低いと認知している人は他者との関係を回避する欲求が強く」、また「いずれの対人欲求の場合でも、欲求が強い人ほど他者から否定的に評価されるのを恐れている」といった主張から翻って確認できる。すなわち、心理的適応の度合いが高い「安定型」は、自身の社会的スキルや社会的コンピテンスを比較的高く認知しているため、他者と関わることに不安や懸念を抱きにくく、加えて他者に肯定的であるため回避したいとは感じにくいものと推測できる。

4-3. 総合考察

本研究では、成人の愛着研究の一端として、IWMにおける自己観・他者観のあり方と対人場面で生じる欲求との関連性について検討してきた。その結果、自己観・他者観のあり方と各対人欲求を抱く傾向には一定の関係性が確認されたといえる。まず、自己観のネガティブさと対人欲求との関係から、自己観がネガティブな人は対人場面において多様な欲求を強く抱く傾向があり、且つそうした欲求はいずれも自己観のネガティブさに起因する側面があるといえる。例えば、他者からの賞賛に肯定的価値を見出し、自己観のネガティブさを補うために賞賛されることを求める人もいれば、他者からの批判によって自己観のネガティブさが触発されることを懸念する人もおり、またそうした拒否されるかもしれない状況自体を危惧して対人関係を回避したいと思う人もいるといったことが想定できる。そして、こうした人たちは、自身のネガティブな表象に対してそれぞれ異なる方略によって回避を行っているといえる。すなわち、いずれの欲求が強い人でも、対人関係の中で自己観のネガティブさに直面したり、それが他者の前で露呈したりすることを避けており、そのために独自の方略を用いていると推察できる。

次に、他者観のネガティブさと対人欲求との関係から、他者観がネガティブな人は他者との関係を回避する傾向があり、また他者からの賞賛を求めない傾向がうかがえる。これらの傾向については、大きく以下の二つの側面が想定される。一つ目は、他者観が否定的であるため、そうした相手から自身が賞賛されたり受け入れてもらえたりするという思いが乏しく、そのため対人関係を回避したいという側面である。そして二つ目は、対人場面において他者や関係性に起因するストレスを感じやすいことから他者を回避したい気持ちが強く、またそうした相手から賞賛を受けたとしてもそこに肯定的意味を見出すことが難しいという側面である。

さらに、成人愛着スタイルの4類型ごとに対人欲求の特徴をみたが、相関分析の結果と概ね重なる傾向が示された。加えて、異なる愛着スタイルが同じ対人欲求を強く持つとしても、抱く欲求の質や背景には違いがあるという可能性が新たに示唆された。各愛着スタイルと抱きやすい対人欲求、抱きにくい対人欲求との関連性については、今後もより詳細な研究が課題といえる。

総じて、成人愛着スタイルと対人場面で生じる欲求には一定の関連性があるものと結論づける。最後に、本研究における今後の課題を二つ挙げる。第一に、本研究では成人愛着スタイルと対人欲求の相関関係に焦点を当ててきた。そこで新たに疑問となるのは、両者の因果関係についてである。すなわち、IWMの形成が先にあり、そのモデルを参考に他者に対する欲求が生じるのか、あるいは他者への欲求が先にあり、その欲求が満たされるか満たされないかという経験を繰り返す中で自他のIWMが形成・強化されるのかということである。第二に、成人愛着スタイルと愛着行動パターン、そして対人欲求の三者の関係性についてである。本研究の結果から、成人愛着スタイルと愛着行動パターンとの間に生じていると想定した対人欲求の存在について、その可能性が示唆されたといえる。そこで今後は、成人愛着スタイルごとに、個人が対人場面でどのような欲求を抱きやすく、それがどのような行動に繋がりがやすいのかという一貫性を探ることもまた課題として挙げられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., Wall, S. (1978) Patterns of attachment: A Psychological study of the Strange Situation, Hillsdale, N. J., Lawrence Erlbaum
- Bartholomew, K., Horowitz, L. M. (1991) Attachment Styles Among Young Adults: A Test of a Four-Category Model, *Journal of Personality and Social Psychology*, 61 (2), pp. 226-244
- Bowlby, J. (1973) Attachment and Loss. Vol. 2. Separation Anxiety and Anger, New York Basic Books, 黒田実郎、岡田洋子、吉田恒子訳 (1977/2007) 母子関係の理論 II 分離不安、岩崎学術出版社
- Bowlby, J. (1977) The making and breaking of affectional bond, *British Journal of Psychology*, 130, pp. 201-210
- Brennan, K. A., Clark, C. L., Shaver, P. R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview, Simpson, J. A., Rholes, W. S. (Eds), *Attachment theory and close relationships*, The Guilford Press, pp. 46-76
- Carver, C. S., Scheier, M. F., (1981) Attention and self-regulation A control-theory approach to human behavior, New York Springer-Verlag
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., Buss, A. H. (1975) Public and private self-consciousness: Assessment and theory, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43 (4), pp. 522-527
- Fenigstein, A. (1979) Self-consciousness, self-attention, and social interaction, *Journal of Personality and Social Psychology*, 37 (1), pp. 75-86
- 橋本剛 (1997) 大学生における対人ストレスイベント分類の試み、*社会心理学研究*, 13 (1), pp.

64-75

- Hazan, C., Shaver, P. R. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process, *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, pp. 511-524
- 色部理恵 (2006) 成人用愛着尺度、氏原寛、岡堂哲雄、亀口憲治、西村洲衛男、馬場禮子、松島恭子編集、心理査定実践ハンドブック、創元社、pp. 710-712
- 泉本道子、辻平治郎 (1984) 自己呈示に関する研究、日本心理学会第48回発表論文集、p. 709
- 金政祐司 (2003) 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—、*対人社会心理学研究*、3、pp. 73-84
- 片岡祥、園田直子 (2008) 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について、*久留米大学心理学研究*、7、pp. 11-18
- Main, M., Solomon, J. (1989) Procedures for identifying infants as Disorganized/Disoriented during the Ainsworth Strange Situation, Greenberg, M., Cichetti, D., Cummings, E. M. (Eds), *Attachment in the preschool years: Theory, research and intervention*, University of Chicago Press, pp. 121-160
- 鍋田恭孝、菅原健介、宮岡等、佐久間哲 (1986) 「自己意識」から見た神経症とその周辺、*精神医学*、28、pp. 379-386
- 中尾達馬、加藤和生 (2001) 成人の愛着行動とはどのようなものか？—女子大学生の自由記述の内容分析を通して—、*九州大学心理学研究*、2、pp. 99-106
- 中尾達馬、加藤和生 (2004a) “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討、*九州大学心理学研究*、5、pp. 19-27
- 中尾達馬、加藤和生 (2004b) 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み、*心理学研究*、75 (2)、pp. 154-159
- 中尾達馬、加藤和生 (2006a) 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか？、*パーソナリティ研究*、14 (3)、pp. 281-292
- 中尾達馬、加藤和生 (2006b) 4つの成人愛着スタイルにおける愛着対象・手段・方略間での愛着行動の一貫性と安全欲求の検討、*九州大学心理学研究*、7、pp. 9-19
- 中尾達馬 (2012a) 成人のアタッチメント 愛着スタイルと行動パターン、ナカニシヤ出版
- 中尾達馬 (2012b) 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響、*琉球大学教育学部紀要*、80、pp. 225-234
- Solomon, R., Schopler, J. (1982) Self-consciousness and clothing, *Journal of Personality and social Psychology Bulletin*, 8, pp. 508-514
- 菅原健介、岩男寿美子、松井豊 (1985) 化粧行動に関する心理学的研究—化粧行動に及ぼす自己意識の影響—、*社会心理学会第26回大会発表論文集*、pp. 106-107
- 菅原健介 (1986) 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について—、*心理學研究*、57、pp. 134-140
- 滝上真衣子、米澤好史 (2006) 対人態度、対人欲求、対人ストレスの関係—新しいネクラ観の提案—、*和歌山大学教育学部紀要*、56、pp. 9-18
- 田島祐奈、山崎洋史、岩瀧大樹 (2015) 青年期における対人欲求および同調行動に関する研究、*学苑・人間社会学部紀要*、892、pp. 105-111
- 渡部玲二郎 (1999) 対人関係能力と対人欲求の関係、*心理学研究*、70 (2)、pp. 154-159
- 山口正寛 (2009) 愛着機能尺度 (Attachment-Function Scale) 作成の試み、*パーソナリティ研究*、17 (2)、pp. 157-167